

●新たな農業施策と施設を活用した振興策について

団員 土井田 学



(コノリー牧場の案内図)

カリフォルニア州郊外のナパ地区に位置し、山間部にあるコノリー牧場を訪ねる。農業と娯楽、教育を組み合わせた新たなビジネス「アグリテインメント」もしくは、「アグリーツーリズム」と呼ばれている牧場を視察した。

施設に到着するとマネージャーのダニエル・ジョンソンさんが出迎えてくれた。カウボーイハットをかぶり昔の西部劇を思わせる姿で登場し、この施設の入り口から楽しく、親しまれるような演出なのかもしれない。まず、案内されたのは、ビニールハウスの植物園であったが、植物の入れ替えの時期と重なり、内部には何もなかったが、通常は土や植物を触って農業体験ができるとのこと。次に、畜舎に案内されると「ニワトリ」・「ウサギ」・「ヤギ」・「黒ブタ」・「ヒツジ」・「ドンキー（ロバ）」などが飼育されていた。ここの体験は、動物と触れ合い、優しく愛する気持ちの教育を目的としている。動物のありのままの生態がわかるように生みたての卵がそのままあり、卵は食べるだけでなく、孵化させてヒヨコから育てるプロセスも、子ども達に学ばせるとのこと。特に、驚いたのはダニエル・ジョンソンさんが「Sit down（お座



(畑での説明)

り)」と黒ブタに言うと犬のようにお座りしたことで、動物も人との触れ合いにより、信頼関係が築けるとい証とも思える。敷地内には、色とりどりの花や野菜を植えて畑を作っていた。野菜に与える堆肥は、オーガニック（有機農産物）でつくる自家製で、ケール、カリフラワー、オニオン、スナップエンドウ等を育てていた。

敷地内を歩いていると次に池が現れ、ガチョウと飛来のカモが住みつくなど、快適な環境が整い常日頃から整備されていることが伺える。

坂を少し登ったところに、農場の広場があり子ども達が楽しく遊んでいる。

道具や遊具も丸太や木の皮を地面に並べて遊んでおり、こうした場所でも自然と親しむようにしていた。この施設を訪れる子どもたちは、年間6千人～8千人と伺った。以上のように、動物に触れる、野菜をつくる、収穫する、食べるそして自然の中で遊ぶなど、人を育むには最高の施設と言える。現在、このようになったのは、個人からこの土地の寄付をうけたことが始まりで、今は、NPO法人として運営している。

市では、農家の高齢化、後継者問題等により、荒廃農地が増えている。農地中間管理事業で農地の貸し借りをを行っているが、寄付してくれる方や無償貸与を申し出てくれる方もいらっしゃるのだらう。有効活用策を考えるべきである。子どもたちが農業の在り方や大切さを楽しみながら学ぶ、アグリテインメント牧場のコノリー牧場は、高齢化の著しい本市農業の今後にも示唆を与えてくれているようであった。



(ダニエル・ジョンソンさんと)

次に、本土からフェリーで約15分、サンフランシスコ湾に浮かぶ小島のアルカトラズ島を訪ねる。面積は、わずか7.63haの島で、この島の歴史は、1868年に軍の要塞、軍の刑務所が造られ、その後、1934年～1963年の29年間は、連邦刑務所などの施設として使用後閉鎖され、全インディアン部族が19ヶ月間占拠していた。現在では国立レクリエーション地域の歴史地区に位置付けられ、国内外から年間170万人が訪れる観光地へと変貌している。



(アルカトラズ島案内図)

観光の目玉は、刑務所内見学であるが、入口に行くと首からぶら下げる機械とオーディオヘッドフォンを渡された。話を聞けば、数ヶ国語の施設案内サービスが行われている。私たちは、もちろん日本語バージョンであるが、流れてくる音声に従って歩くと迷うことなく順路どおりに行ける。拠点ごとにドラマ仕立ての説明になっており、臨場感が味わえた。本市では来年度、本市と台湾を結ぶ定期便の就航やG20愛媛・松山労働雇用大臣会合等々もあるうえ、松山城や道後温泉の外国人観光客も年々増えている状況であることから、本市にこのアイデアをぜひとも取り込むべきと思った。刑務所内部は、セルハウスと



(刑務所内独房)

と呼ばれる2階建てのズラリと並んだ独房があり圧巻である。あの有名なアル・カポネもここに4年半収監されていたと伺った。ただ、ここでは死刑執行はない。

案内サービスの説明では、島の周りの海域は、潮の流れが速く水温も低いため、脱

獄不可能と言われていたが、この島から3人の脱獄囚が存在し、スプーンでコンクリートに穴を開けたのだから驚く。3人は現在も逃亡扱いで、死亡説や無事逃げ延び南米へ向かったとの説がある。案内サービスのドラマの一部を紹介すると、「親から帰ってくるなど絶縁の手紙が届いた囚人の話」や「面会人が誰一人として来ないと諦めていたある日、看守から面会だと呼び出されて行くと女性で、一目見て妹とわかった。昔の面影が残っていた・・・。」

観光客をピストン輸送するフェリー料金4,000円、年間170万人の観光客を運び土産物店もあり、賑わう刑務所ツアー、人生の悲劇の場所が今や一大観光地として生まれ変わっていた。

次に、フェリー・ビルディングマーケットプレイスを訪ねる。時の流れ、時代の変遷を感じたところであった。ゴールデンゲートブリッジが1937年に完成して以来、年間5千万人の通勤客、旅行客の往来が、1日170本のフェリー運航があったこの地区が衰退の一途を辿り、数本のフェリー航路を残す



(ビルディングマーケットプレイスの外観)

のみとなり、時代に取り残され、まさに忘れられた地区となりつつあったが、17年前に大改修工事を行い、マーケットホールを設け、この近くで開催していたファーマーズ・マーケットをここに移設して、フェリープラザを誕生させ、昔の賑わいを取り戻した。また、ファーマーズ・マーケットはその名のとおり、地産地消の地域密着型を目的としており、農家、農場から農産物が直接持ち寄られ火・木・土曜日に開催されているとのこと。視察日は、あいにく金曜日で開催していなかったが、スペースの広さから開催規模が推察された。

本市では、三津、高浜の港湾地域と松山観光港が、まさしくこの施設の状況に似ていることから、立て直したこのフェリー・ビルディングを参考にしながら本市の実情に即した活性化を図る必要があると思った。



(ファーマーズ・マーケット)

数ある物販の中に、日本語で書いている商品を見つけた。湯袋で高知県四万十市のものであったため、流通の現実に変更で驚かされた。結論として、人が集まる所に物が集まるそして活力が生まれる。

視察を終えて・・・。

松山サクラメント姉妹都市協会の水島夫妻をはじめ今回の視察で出会った全ての方々に感謝申し上げるとともに、今回の研修で学んだことを今後、市民のために活かしていきたいと思っている。